

## 家族関係からみた抜毛症男児の箱庭療法の経過

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/1292">http://hdl.handle.net/2297/1292</a>

# 家族関係からみた抜毛症男児の箱庭療法の経過

谷 野 幸 子

(富山県精神衛生センター)

## はじめに

抜毛症は、Hallopeau による報告以来、主として皮膚科または精神医学的観点から考察されて来た。なかには、脳波異常を指摘する報告(池淵ら, 1982)もみられるが、最近の多くは、これを神経症圏のものとしてとらえ、精神力動的、あるいは家族関係の観点から検討している(小口ら, 1976; 木村ら, 1962; 黒田, 1975)。小口ら(1976)は発症年齢を幼児期、小学校低学年、小学校高学年以上に3分し、それぞれその心理機制も予後も異なると論じている。高年になるにつれて抜毛癖は既に形成されている歪んだ自我の身体的表現として理解できるという。

本稿で報告する事例は、小学校低学年に発症しているが、それ以前から爪かみ、無気力、集団不適応等の問題行動がみられ、抜毛は一連の神経症的症状の一部と考えられた。この事例に母子治療を実施したところ、抜毛自身は早期に消失し、他の諸症状も徐々に軽快していったが、その経過中に一時家族全員が次々に身体的症状を呈し、これは母や父の態度変化と共に消失していった。以上から、患児の症状は、母子関係のみならずその背後にある家族全体のもつ問題に由来するものと考えられた。本報告では、患児の症状が消失していく経過と家族の動きを照らし合わせながらその関係を考察する。

## 症 例

症例Jは、初来所時7歳(小学2年生)の男児である。

**主訴** 抜毛

**家族歴** 家は代々続いた由緒ある寺である。両親と2歳年上の姉、2歳年下の弟、加えて寺の一切を取り仕切ってきた祖母との6人家族である。父(38歳)は2人姉弟の末子で、かつて周囲の要望に押されて仏教大学へ進学、3年時に住職であった父(患児の祖父)が死亡した為、否応なく寺の主となった経緯がある。趣味は、コーラスやアングラ絵、写真、商業デザイン、ラジコン設計等と幅広い。子供は嫌いであるという。母(32歳)は3人兄弟の末子で、勝気・几張面な性格である。中学、高校生時代は、プロテスタント系の教会へ通ったこともある。高校時代に声学を志し某芸大を受験したが失敗した。浪人をすることは許さ

れなかったので、保母養成コースに進学した。しかし、その方面で就職する気持はなかったという。2人はある合唱団で知り合い、周囲の反対を押し切って、母の卒業と同時に結婚した。母は寺の嫁としてではなく、M家の嫁として迎えられたとの意識が強い。結婚後母はすぐ妊娠したが気付かず流産してしまった。この時父は母をなじり、「世間体の為に見舞った」と言ったという。母はもう婚家先へは戻れないのかと思うと同時に、夫をも信じられなくなったのことである。これ以後、子供をうまく育て上げることだけが自分の立場を守る術であると思うようになったという。祖母は67歳で、一家の経済を握り寺の一切を取り仕切ってきたしっかり者である。姉(9歳)は成績優秀で、一見して大人びた礼儀正しい女の子である。兄弟の中では少しは父に可愛がられた方だという。かなり以前から鼻をならし両目をつむるチックがある。弟(5歳)も又礼儀正しい子である。4歳頃に1日歩行できなくなったことがある。我々がかわりをもって間にも左足痛を訴え歩行不能となりペルテスを疑われ諸医を受診しているが、明確な所見が出ていない。この他、年に2回程自家中毒症状を呈することがある。

**生育史と現病歴** 胎生期は2~5か月まで流産防止の治療を受けた。出産は正常で、生下時体重は3,780gであった。新生児黄疸のため10日間光線治療を受けた。乳児期は湿疹が出やすかったが他に特記すべきことはなかった。1歳半で歩き始めたが、言語は「マンマ」「ブーブー」の段階から一向に上達しなかった。2歳頃まで、母は客の応対に追われた為、腰ひもで柱につないで外へ出しておいたことも多かったという。言語以外の発達は普通だったが、好き嫌いの激しい神経質な子供であつたらしい。幼児期の躰は徹底的に厳しく、細かいことまでいちいち注意されて育つたとのことである。

3歳児健診で言語の遅れが指摘され、「ことばの治療教室」へ通った際には甘えさせるよう指示された。4歳になると宗教系の幼稚園に入園。女の子の友達はあるようだったが、園の活動には参加せず寝転んだままにしていることが多かった。

この頃から両手足の爪かみが始まり、来所に至るまでJの爪を切る必要は全くなかったという。5歳になると音楽

教室と書道塾に入れられたが、音楽教室では寝転んだままのことが多く、書道塾の方は腹痛を訴えて、行くのを渋ることが多かった。この間の既往症として、3歳時に風疹、4歳時に中耳炎、百日咳、5歳児に耳下腺炎、水痘に罹患している。又、3歳頃から年4回位は高熱と激しい嘔吐を繰り返す、その都度自家中毒と診断されている。

まもなく小学校に入学したJは毎月のように自家中毒症状を呈するようになった。学校では同級生の名を覚えることもなく、「あの子」「この子」としか言わない。試験では、やれば80点以上の成績をとるのに、先生が側にいてせかさないと手をつけない。これは家でも同様で、自宅の境内に沢山の子供が遊びに来ていても窓から見ているだけで中に入ろうとはしないし、宿題も自分ではしようとしないので母が夜中までつききりで教えていた。こんな時、Jは、「お母さん遅くまでありがとう」と礼を述べたとのことである。

小学校1年生の3学期、2月頃に母はJの頭頂部の脱毛に気付いている。3月に入り、学級の担任から抜毛があることを知らされた。そういわれてみると家でもテレビを見ながらあるいは宿題をしながら抜いている。早速、母が学生時代の師に相談し、その紹介で某精神科を受診した。医師の間にJは明るく抜毛を認めたとのことである。診察の結果、神経学的には特記すべき所見がないということで、富山県精神衛生センターに心理治療が依頼された。初診時の医師の所見では主訴の抜毛癖（直径3cm、円状）や爪かみの他に、語彙が少なく発音もやや不明瞭であることや、学習を自分からすすんでやろうとしないこと、友人が少ないこと、涙もろい反面カッとしやすいことなどがあり、これらの言語・学習・集団適応・情緒等はすべて一括して情緒的問題としてとらえられている。家庭の問題として、父が子供嫌いであることが指摘され、特に弟出産後の母とのつながりの歪みに注目された。

**治療計画** 治療の目的は上記の問題すべての解消あるいは改善であるが、中でも主たる問題は抜毛癖であると思われる。これは、学習に対する母の過剰な期待と、完全主義的な宿題の押しつけが直接のひきかねとなっていると推察された。夜中まで側で勉強を強要する母に対して、「お母さん遅くまでありがとう」と言う子供と、それで安心する母のあり方に、歪んだ母子関係があると思われる。Jに対しては自己表現の場を与え、より子供らしい姿へと戻すことが肝要と思われた。また母に対しては、極端に過干渉になっている自分、子供に不自然な完全さを求める自分を洞察してもらうことが必要と思われた。

抜毛癖をもつ子供の場合、母に対する「不快感」、「不信感」（小片ら、1978）は相当根深いとされている。J

の場合もこのことを想定し、遊戯療法の中に、自己表現がより可能であると思われる箱庭療法を取り入れることとした。母には当面、受容的な雰囲気の中で、育児態度を焦点とした面接を行うこととなった。Jは筆者が担当し、母は筆者の同僚である保健婦が担当した。チーム・リーダーには、紹介医で嘱託医でもある医師がなることとなった。治療頻度及び時間は、概ね1週1回、1時間とした。治療の経過は月2回チーム・リーダーに報告し、随時医師の目で診察、フォロー、アドバイスが行われることとなった。

## 治療の経過

治療の為の通所は昭和56年4月11日に開始され、昭和58年7月現在まで計78回を数えている。このうち、チーム・リーダーの診察が4回行われている。

Jの治療室は、当初箱庭のある小部屋をあてたが、22回以降は、本人の希望によって、この部屋と運動遊具が多い大部屋のどちらかを選ばせ使用した。箱庭は本人の自主性にまかせ、作りたい時に作れる態勢にしておいた。

以下に治療の流れを10期に分けて記した。

### I 第1回（S56.4.13）—Jの自己紹介

初来所から18日後である。筆者はJとは初対面であったが、「こんにちは」と声をかけるときちゃんと起立し、「はい！こんにちは」と模範的な挨拶をする。部屋に案内するとすぐ箱庭に興味をもったようだがすぐには作り始めず、「戦車が好き」、「お父さんラジコン好き」等と言いながら玩具に触れている。息を呑み込むような吃音様の話し辛そうなしゃべり方である。20分程して、筆者（以下Thと略す）に線路をつながせ、トンネル、線路と一気に置いていく。木を次々に周囲に置き、「森のように」とつぶやく。左下4分の1程度を指で囲み「水…」とつぶやくが結局はダンプカーで砂を運び埋めてしまう。中央に工事用の車両を並べ、歩道橋、消火栓も置き、ガソリンスタンドも動きを確かめた上でにっこり笑って置く。はじめの内、柵を通路代りに置いていたが取り去り、レールを正円に近くして完成。いつのまにか元気一杯になり、「J君こんなもの平気」と言っでは砂場のふちをヒョイヒョイまわって自動車や木製列車を手渡しThに連結させる。最後に大きいビニール製カヌーに空気を入れて脹らませ嬉しそうに帰宅した。

箱庭療法では1回目の作品が自己紹介であるという。Jの場合もそのように思われたので詳しく記述した。

年齢からみてもほぼまとまっていると思われるこの作品で、Jは曼陀羅に近い構図を作っている。Thに作らせた

円状の線路の中で今まさに工事が始まり、エネルギー補給の為にスタンドも十分点検され準備された。レールの内と外とは歩道橋で繋がれ、そのすぐ横には消火栓が置かれて安全性が確保されている。一旦「水」と指定された左下の部分にはトンネルが置かれた。母との関係の中で一度はくぐらねばならぬ暗闇がかくされているように見える。Thはこの箱庭から、Jには治療を開始するだけのエネルギーとまとまりがあることを感じとり、当初の方針どおり治療を行っていくこととした。この日抜毛部は5.6cm四方で白く地肌が出ていた。

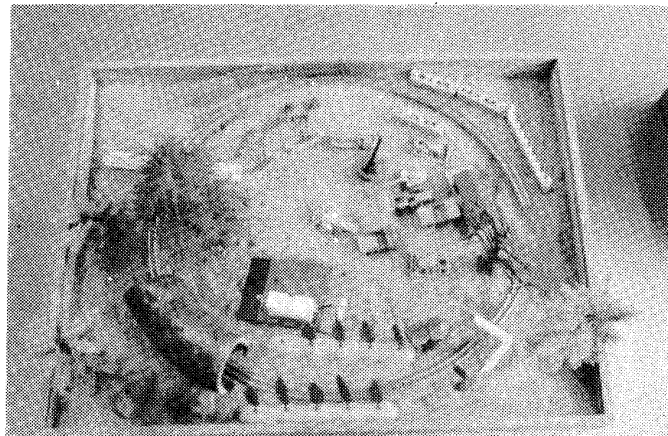


図1. S56. 4.13 —森のように—

母の面接では、育児の方針について、家族内の意見が分かれていることが述べられた。

## II. 第2回～第4回 (S56. 4.23～5.22)

### —防御を解いて

来所後1か月～2か月。初回に箱庭を作った後は暫く箱庭には手をつけず、水溜の向こう側に置いた的をねらい打つ遊びが中心になった。ねらい打つ対象は、人間から動物、そして怪獣へと回を追って移行していく。Thも役割分担があり協力する。Thはねらい打つものが段々得体の知れないものへと移っていくことを感じとりながらJの行動に従っていた。当初見られた大人びた行儀良さは、徐々に姿を消したが、これはJとTh 2人の世界だけのことで、治療室に突然の来訪者があった時には元のJに戻り、きちんと挨拶したのが印象的であった。

この期間、抜毛は観察されていない。抜毛部の髪は5月22日には5cm程度まで伸び、5cm×2cm程度の部位がかすかに周囲と区別できる。毎月起きていた自家中毒は、3月末以後は5月に1回あっただけである。家庭では、母が姑から「愛情が足りないからJがこうなった」と言われ衝撃を受けている。面接で夫や姑への不満をあきらめ半分に語っている。担当者は、母が何かにつけ誰かに支持してもら

わないと安心できないようであること、これは家族関係と関連がありそうだと感じている。5月9日、弟が左足痛を訴え2日間這って移動する状態となった。3か所ばかり病院をまわり一部ではペルテスも疑われたが、どうもはっきりしない。経過をみることとなった。

## III. 第5回～第15回 (S56. 6. 2～9.1) —闘いの兆し

1回目の箱庭作品から2か月を経過し、5回目のセラピーでJは2つ目の箱庭(図2)を作った。



図2. S56. 6. 2 —飛行機が火事だ—

白熊2匹を箱庭の中へ入れ向い合わせたり、砂に手を触れたりしていたので、「何か作ろうか」と問いかけると「うん!」と元気良く返事し、Thに手伝わせて右上半分の砂をシャベルで左の方へ寄せる。仕上げは手でならし右下隅に戦闘機を3機上に向けて並べる。次に飛行場関係の車を左上に並べ、次いでジャンボ・ジェット機を持ち込もうとする。しかし、置く位置に迷い、結局戦闘機3機を取り去り、そこにジャンボ機を置く。飛行機の中が火事だということでジャンボ機の2つの入口に消防車の梯子をかけ消火する。突然大小の飛行機を手にもってとばせ机の上に置く。戦車をとって来て箱庭の中に置いて「ババーン」と言ってから飛行機をとりに行く。「これが帰る合図だったの」という。ひとしきり、ままごと道具や他の細々とした玩具をいじり、花畑や枯木の枝つけをしたあと追いかけっこなどをして終了する。

飛行機が火事だということで大変な状況だが、一応消火された。戦闘機や戦車が不十分ながら登場し、闘いの兆が垣間みえる状態である。

このセッションのあと、チーム・リーダーによる診察を行った。Jは抜毛の減少が確認され、やや落ち着きなさが認められている。チーム・リーダーから治療担当者に対しては、全体の動きとして父を巻き込んでいく必要があるのではないかとの示唆があり、治療継続の指示があっ

た。この時父親の来所をすすめたが、明確な返答はなかった。

なお、本児は体型的に幼児的で、話し方も幼稚であり、身辺処理も遅れ勝ちであったことから、一応の確認のため6月11日にWISCを実施した。後半はふざけてしまったので、中断したが、VIQは105であった。

2回目の箱庭を作った日、Jは「おもちゃ持って来て良い？」と秘密めいて話しかけ、以後次々に『ジュース缶20個で作った筏』や『潜水艦』、『キュービック』などを自宅から持参して来た。しかしこの時期、治療室での遊びは殆んど水遊びに終始した。治療室での動きは動きとして受け止め、持参した玩具や作品はJの家庭での生活や思いを告げるものとしてみていった。Jの治療室での遊びは腕白さが目立つようになり、同時に息を呑み込むような話し振りも、特別な時以外はみられなくなった。家庭でも反抗的になり、「お母さんと喋らない！」と宣言したり、父にアカンペーをしたりして両親に衝撃を与えている。学校では他児に足をかける等の悪戯が激しくなる一方、友達ができつつあった。抜毛の跡はこの頃には全て姿を消した。

15回目のセッションで3回目の箱庭を作った。

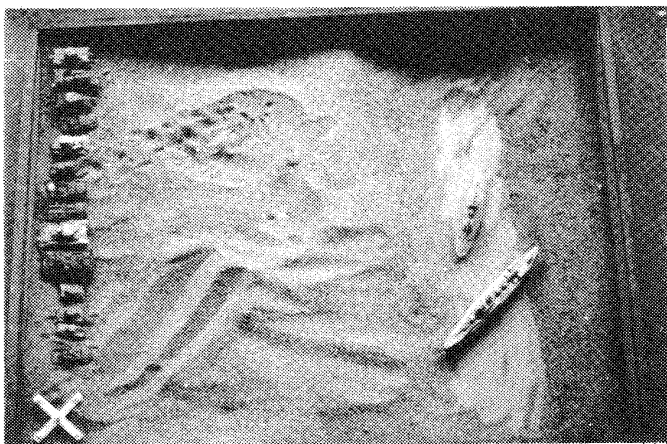


図3. S56. 9. 1 —戦車と潜水艦—

左側に戦車がずらりと並べられ、右側の川には軍艦が浮んでいる。左下隅には信号機が上の部分だけを残して埋められた。軍艦はこの後本物の水槽へ潜り終了。

いよいよ戦車、軍艦が登場し、闘いが始まろうとしている。しかし、箱庭の中での動き、玩具の動きは少なく闘いの方向ははっきりしない。信号機が左下隅に埋められているのはこの場面には不似合いであるが、母からのコントロール、枠付けを意味するのかもしれない。中途半端に埋まっているところが枠付けの拒否にも、まだ残る枠付けの表われにもとれる。軍艦が無意識を表わす「水」の中に潜っていったのは、もっともっと深くにある問題を表わすようにも思われた。

この期間には母の提案で両親と子供達が母方姉母子を誘って一泊キャンプを行っている。実現までには、祖母への遠慮、夫の拒否など迂余曲折があったようだが母の努力で何とか実現にこぎつけている。このような夫婦子供単位の動きは初めてのことでありという。

その直前の8月4日の診察では、抜毛と自家中毒がみられなくなっていることが確認された。また、姉、弟に心因性らしい症状が出ているのは、母がJの問題にのめり込みすぎることよるとの判断で、good enough mother（まずまずの母親）という考え方が母親に提示された。

#### IV. 第16回～第24回（S56. 9.11～11.20）—闘い、そして変化

2学期になり友人は2人に増した。宿題は1人で書き上げることが出て来た。その矢先に、教室に展示してあった級友の作品を黙って持ち帰るという事件があって母は急に混乱をみせ始めた。今まではJの話が中心であった面接で、母親自身のことが多く語られるようになった。性格を語り、深刻に悩み始めた後、頭痛、疲労感を訴え、頭の中で花火が爆発するような感じがするといった不安が現われて来た。症状は短期間で変化したが、肩甲骨の下が深呼吸

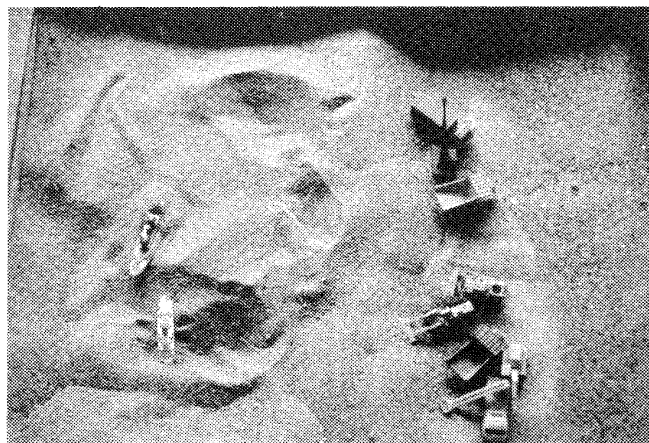


図4. S56. 9.11 —宇宙戦艦大和…爆発！—

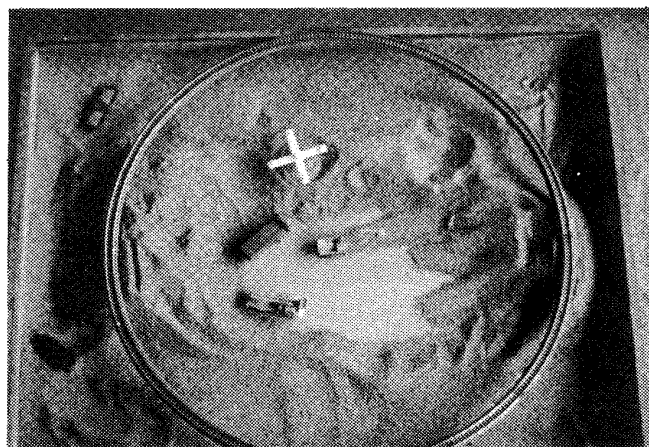


図5. S56. 9.26 —枠からはみ出そう—

や食事の際につかえるという体験もあって、母の病院巡りが始まった。そうする内にも、自分の嫉の厳しさは八つ当たりにはすぎなかったのではないかという反省や、長女に「鬼のお母さん」と呼ばれたこと、長女には長い間チックが続いていることも話すようになって来た。

母の混乱と呼応するように、治療室でのJも混乱を極めるようになった。

9月11日（第16回）に作った4回目の箱庭（図4）では、宇宙戦艦大和が船体を半分土の中に埋め「爆発してしまう」のであり、翌週（9月18日、第17回）には、自分自身が砂箱の中に入って部屋中に砂を投げ散らしてしまう。そしてその次の回（9月26日、第18回）の箱庭（図5）では、砂箱のふちぎりぎりに線路を置き、その上の汽車は転覆、工事の為の車も山につっこんでしまった。この時も信号機は上だけ残して埋められている。この様な状態でも何とか整理、コントロールしようとの思いだろうか。

又次の回（10月12日、第19回）ではピストルを持参してThに打たせてJは倒れてしまったし、その次の日（10月9日、第20回）では部屋中にバケツで水を撒き、治療室は大洪水になってしまった。

毎回のようにつづくJの激しい表現にThの側の疲れ、迷いがなかったわけではない。しかし、ThはJにエネルギーが蓄積されており、現在、変身と脱皮が必要なのだと判断しセラピーを続行した。判断の根拠は以下のことなどからである。

○9月11日の箱庭作りのあと、全版画用紙を3枚もつないで人力飛行機の設計図を描いたこと。これは、「2人の人が自転車をこぎ、ターボエンジンのような力を出してプロペラをまわす」のだという。

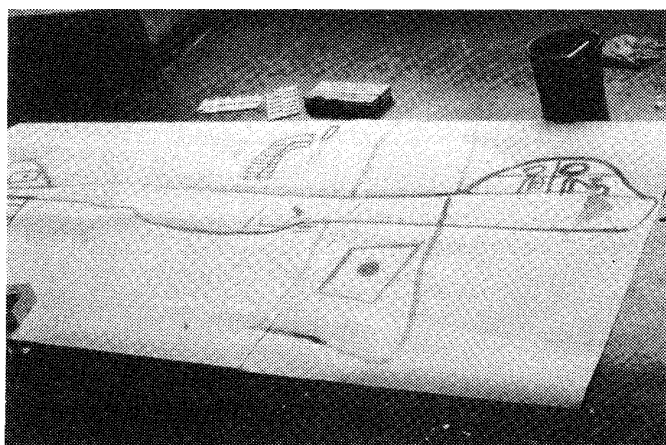


図6. S56. 9.26 —人力飛行機設計図—

（解釈）Jが設計する旅立ちの為の飛行機にThが付き合ってくれることを期待している、あるいは2人ならやれるという意気込み。

○9月26日の箱庭作りのあと、変身の象徴とされる蛇の玩具を次々Thに投げつけて反応をみる。又、Thを負ぶって歩いてみせる。

（解釈）Jの変身にThはついて来れるのかと試しているのではないか。しかし、Thをかついででも頑張れるというJの力の誇示か。

これまでも治療後のJは車の中で眠り込み帰宅後と合わせ3時間は眠るということであったが、この頃は一層疲れ切るようで、4時間程も眠るようになったという。

10月23日（第21回）には、エネルギーの放出がスムーズになるのではないかと考え、治療室を運動遊具の多い部屋に移し、思う存分運動させた。Jは「僕すごい？」を連発しながら生き生きと動きまわり、いつのまにか自分のことも「J君」から「僕」へと呼びかえていた。

V. 第25回～第27回（S56. 11.27～12.25）—母子の融和  
荒れに荒れた2か月間を経過し、Jはようやく落ち着きを取り戻した。

12月11日（第26回） 所在なげであるので家族画をすずめてみる。Jは「うん」と答えるがとりかからず、象なら描くと言う。マンモスを描き父だという。



図7. S56.12.11 —マンモス（父）—

「化石になった奴、こんな牙で意外にすごいんだ。耳がない」との説明である。このあとトランポリンの上に大型積み木でピラミッドを組み立て、その中央部分に身体を横たえ最後にパッととび出した。「苦しくなった……」、「ああ良い気持ち、すっきりした」と語り「生き帰ったみたいね」とのThの言葉に「うん」と答えた。

父をマンモスで表現するJに驚きもしたが、家族の中の誰よりも父を描くことで、J自身が父と向い合う必要性を暗示していると思われた。ピラミッドの中に横たわり、一時の後その中からとび出した行動は、過去の自分の死と、新しい自己の再生を具現させてみせているようだった。これが1区切であると推測したことは当たっていたようで、次の



回（12月25日、第27回）には久しぶりに箱庭のある治療室を選び次の作品を作った。

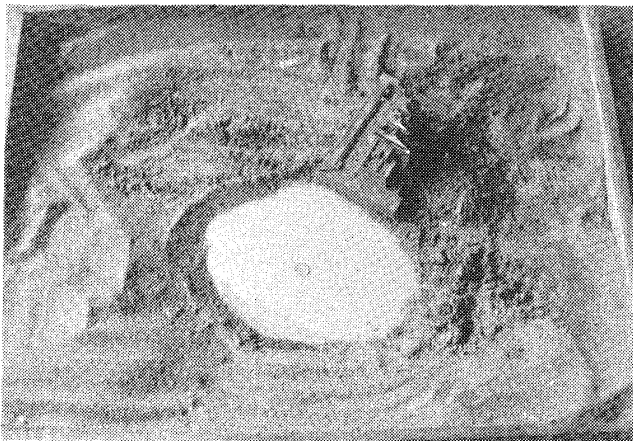


図8. S 56.11.25(No.1) —城と金色の鯉—

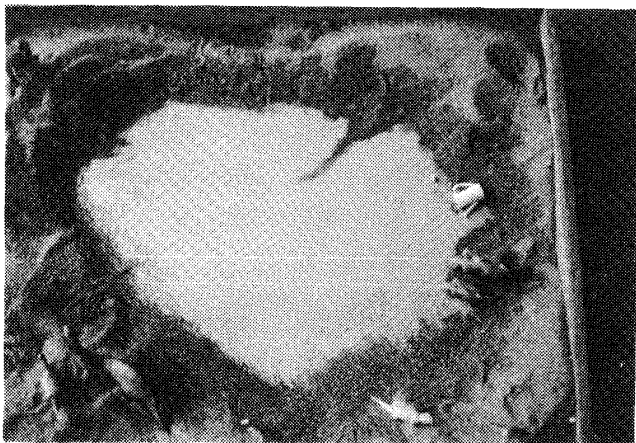


図9. S 56.12.25(No.2) —食事をする親子—

砂を左下へ寄せ、小さい湖を作る。まん中におはじきを1つ置き、「不思議にまん中に金色の鯉がおりました」という。湖の側に城を置く。すぐ続いて、城、おはじきを取り去り、湖を広げて、「ホーラ！」と言う。怪獣を集め、まず左下に大きいものを置き、椰子の木を2本、そして怪獣、と次々置いていく。親子のペアが2組ある。食事をしている場面とのことである。

最初の箱庭はJが「不思議に」というように何か現実離れた印象がある。手品の種明かしのように「ホーラ」と展開されたのは、伸びやかな親子の交歓の場面である。初回の箱庭で埋めてしまった水をのむこの場面は、Jが母を受け入れ始めていることを示しているようである。

時を同じくして、12月11日の面接で、母は父と寝室を共にしていないことを打ち明けている。家族歴で述べたような、初めての妊娠から流産にまつわって出て来た夫への不信感や、義務感のみによる夫婦の生活の味気なさを語っている。夫は何故長女ばかりに声をかけ、Jには厳しいのか

と訴え、母自身は長女が何をしても感動しない、と言う。何故可愛いと思わないのかわからないとも言う。Jに対しては保育時間が長びいただけでも腹立たしく、抱きしめなかったし、この子が大きくなることを思うとゾッとしたりという。それがこのところJを抱いても急に白けた気持になり始め自分に驚くという。母にとっても向い合う相手は父へと移って来ているようであった。

母を受け入れ始めたJは退行を示しはじめ、家では指しゃぶりがみられ、治療室においても何かとThに触れたがり、Thと抱き合うことで気持ちが満たされるようであった。

なお、12月14日には、学級の担任が来所し、短気である、ふくれっ面をする、よく泣く、指しゃぶりをする、何をしてもないことが多い、との報告を得ている。

#### VI. 第28回～第33回（S 57.1.14～ 3.2）—家族全体の病

初来所から1年近く経過したこの頃、家族が次々と病気にかかっていった。父は狭心症の発作を起こし、弟は自家中毒、姉は、自律神経系の発作（振戦、油汗、顔面蒼白）、祖母が心肥大と神経痛という具合で、元気なのはJと母のみであった。

家庭での大きな変化は、夫婦が父の心臓発作を契機に6年ぶりに寝室を共にするようになったことである。母はもうJを抱きしめたいという衝動はもたなくなっていた。姑は初めての病気ですっかり気が弱くなり、諸医を巡る毎日であった。

Jはすっかり幼さが脱け、叱られればとにかく泣くという状態からも脱け出して、母以外の誰の制止もきかぬ男の子になっていた。家庭での痾癩、横暴は激しく、父は気違いに何をいっても仕様がな、と殴らなくなった。

反抗的で、セラピーの日ばかりを指折り待つJに母は腹立ちを感じ、通所を続けることに迷いを生じはじめた。センターしか楽しみのない子なのか、何の為に通所しているのか、段々深みにはまっていくのではないかと、Jには表面に出ない精神病があるのではないかと疑問である。

この同じ日、治療室ではJがThに軽い怪我を負わせている。終了を拒否するなどの前景があったのだが、自宅から持参して来たおもちゃの木刀のつばがはずみで割れたことから一気に感情が爆発し、Thに刀の鞘でなぐりかかった。思わず受け止めたThの手がみるみる腫れ上るのを見ながら、この日Jはひどく怒って帰って行った。次の日にJは初めて来所する日を催促しなかったという。これを境に、母の来所への迷いは聞かれなくなった。Jのacting outは、J自身が、真に求めているのはThではなく母であることを表現しているのかもしれない。又治療の進行中、困難な問題を抱え、Th自身病気に罹患することがある

というが、それと似た意味で、家族の病の渦の中で、Th 1人無傷ではおれないという解釈もできるかもしれない。

3月2日、母の迷いを整理しておく為もあって診療を実施した。家族内では兄弟喧嘩、父への反抗が目立ち、学校では弱い者いじめ、成績のムラ（0点～100点）が問題になっていた。母はJの父への反抗を評価している。父は子供を受け入れ始めたようだが、姉はこのままではどんどん悪くなり母が駄目になるのではないかと心配している。祖母は「どうもならん」と一歩下がって試しているという。この回の母へのアドバイスとして、Jの反抗を自己主張として評価するだけでなく、次の段階としてより好ましい方向へ導くことも必要であることを伝えた。又、父の助力が身体的にむづかしいのであれば、代理的な力の存在が必要であるが、個人的競技である剣道を習わせるのも一案でないかと話した。

なお、acting out 後の処理として、怪我をしてしまっただけでは一緒に遊べなくなる、危険なことはしないというルールの中でセラピーを続けなければならないこと、これを破れば時間が来なくても終了することを約束した。

#### Ⅶ. 第34回～第45回（S57. 3.20～ 6. 18）—父の登場

試練の時期が過ぎ、3月に入り父は目立ってJの遊び相手をつとめるようになった。当初「無理をして…」とみていた母も徐々に子供の父親としての夫を信頼するようになった。夫婦の絆が少し結ばれようとしているようであった。夫婦は初めて2人の居室で一杯のコーヒーを飲もうと試みる。翌日の祖母の身体具合の悪さは1つの抵抗であろう。母の話は姑や『寺』『宗教』のことに移って来た。『寺』に嫁したことで『玉の輿』と言われたことへの抵抗感、中高校時代にキリスト教会に通った自分にとって仏教は商売でしかなかったこと、子供を立派にしたいという思いは周囲に対する防御であったことなどが淡々と語られる。

父の態度の変化に伴ってJの家庭での反抗は消失した。治療室でも物を振りまわすなどの乱暴さが徐々に減少し、家庭や学校での出来事をよく話してくれるようになった。Jの興味は過去のものへと向っているようで、好んで『シーラカンス』を描き、三蔵法師を語り、峠茶屋のプラモデルを修理したりした。珍らしく祖母が2週間ばかり家をあけ、夫婦が解放感を満喫している間に、Jは「おばあちゃんが一番好き」と言っている。

寺と十分同一化できぬままに母親に従う形で跡を継いだ父と、寺を否定しようとしつつその寺で認められる為に自分を固い殻で守り続けざるを得なかった母とが、寺の象徴のような祖母の不在を機会にあらためて夫婦であることを確かめあっているようであった。しかし、祖母をまじえた寺

の中でこそこの家族が生きていかなければならないことを、Jの言葉が示しているように思えた。

この頃には抜毛もなく、学校でも積極性を示し始めたJに対して、Thは、父と母、父と祖母、寺の中の家族としての問題を解きほぐしていく、文字通り水先案内人としての役割を果たすために来所していると解釈し、動きを見守っていた。

#### Ⅷ. 第46回～第61回（S57. 7. 2～ 11.19）—再び不満と闘い

この間、治療室でのJには余り変化が見られなかった。唯、一層喋るようになり、母のことを「宿題しろしろばかり言う」「最悪だ」等と愚痴ったり、学校でのでき事を詳しく説明してくれたりするようになった。攻撃性はかつてのような激しいものではないが、時折イライラして激しく物を投げたり、Thを叩こうとすることがあった。

一方、母はこの期間、長女、J、夫への不満を次々に吐露している。以前から長女に対する憎しみに近い感情が語られているが、この子の対人関係の悪さが表面化しているようであった。逆戻りするようになり、母はJにも時折雷を落しているようだった。Jが治療室で攻撃性をみせるのは、決してこの雷のあとであった。

J自身は友人ができ、学校でもすすんで係を買って出たりするようになった。

J兄弟と両親が1つのまとまりとして行動することも身についたようで、昨夏につづいて2泊3日の家族キャンプをし、今年4回目のコンサート鑑賞などが報告されている。しかし、長期にわたって一進一退状態が続いているようで、担当者側にいささかの焦りがあったことも否めない。

#### Ⅸ. 第62回～第69回（S57.12. 3～ S58.3. 11）—新たな夫婦として

この頃には、母の動きとJの動きが符合していることは既に明らかであった。

11月26日、Jの宿題の処理に端を発し、両親は初めて率直に語り合った。久し振りにJの横について宿題を教えたところ全くできないので母が腹立ちまぎれにJをなぐり、Jが泣き出したところへ父が帰宅。Jを前に勉強に対する2人の考え方やJの気持ちを話し合ったらしい。この日を境にJは急に少年らしいたくましさを見せるようになり、治療室での攻撃性は姿を消した。いかにもしっかりした様子であり、反面年相応の素直な甘えも見せ、伸び伸びしている様子が見てとれた。

学校ではそろそろJの定期的な欠席（通所のための）が見咎められるようになって来た。



担当者の間では終結の時期が問題となり、12月7日、診療を行って結論を出すことになった。Jの落ち着き、男の子らしさと両親の問題意識の芽生えが評価され、通所の間隔を2週毎に伸ばすことが母子に提案された。これに対し、Jは突然うつむいてしまい言葉少なくなり、母はあわてた感じで、少し前にJがわざとのように髪を抜いてふっと吹いてみせたという出来事があったと話し出した。両者の反応は共に治療的かかわりの必要性を示すものであった。

しかし、学校との調整の必要性和、通所間隔を元に戻すことによって起きる依存性を懸念して当面は2週に1回にすることに決めた。時期は、Jが9歳の誕生日を迎えるあとということになった。

9歳の誕生日には、初めて3人の友人が招待できた。年が明け、友人からの初めての年賀状を受けとった。

3学期になり、Jの爪かみは余りみられなくなり、苦手な国語でも自ら手を上げて発表した。

3月11日、Jは7回目の箱庭を作った。

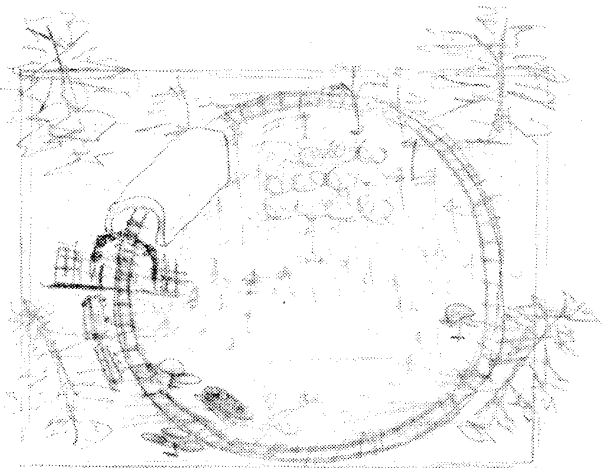


図10. S58. 3.11 —破壊された町—

この時の箱庭は、『破壊された町』という題である。来所前から植物を使って、まん中に作品『タートルゴでスネークにもなる奴』を入れるつもりで来たという。砂の中にまじり込んでいたおはじきを丁寧に取り去り砂をならす。砂漠のようにするのだという。四隅に木を立て、次いでありったけの木、花を並べる。トンネルを左上に置き、「ほら、こうすると昔町だったことがわかるでしょう」と言い、線路も丸く置いて、上から慎重に砂をかぶせる。残っていた小さな木口も1つ残さず植え、車を転覆させる。「ほら、こうならないと木は生えないんだよ」という。前中央にタートルゴ・スネークのために丸く場所があげてある。ここまで作った後、タートルゴを作り始めたが、なかなか思い通りのものができない。少し苛ついた様子で箱庭の中に戦車や飛行機も横倒しにして入れた。そしてこの作品を母に見せたいと言い、母を呼び込んでこの回は終了した。

箱庭をみた母は、転覆した汽車に困惑した様子であったが、「でも、とにかくこの花が良いわね」と花畑を指さしつつ自分にも言い聞かせているようであった。

この箱庭は基本的には、第1回目に作った作品と構図的には同じである。第1回の時につぶやいた「森のように」という言葉が、2年後のこの作品でむしろふさわしい。心的深みを表わす森には花が咲き乱れ何やら暖かみを感じられる。

この箱庭の日、母は、夫と話し合ったこと、同じ青葉も今違うように受けとれること、Jしかみえなかったのが家族全体がみえるようになり、皆で生活している実感がもてるようになったことなど充実した気持を語っている。

X. 第70回～第78回 (S58. 3. 25～7.20) 一家族全体がみえる生き方

その後は、来所を半分に減らされたことに抵抗をみせながらも大きい変化はなくすごしている。『デラックス・タートルゴ』なる蛇と亀と列車に変身する親子を作ることに専念したり、給食の粽を大事に持参し、Thに食べさせてくれたりしている。言葉で自分の思いを伝えることが多くなり、自分はわざとじゃなく呆一としてたのに母から「センターへ行っている甲斐がない」と叱られたこと、お母さんと先生がもうセンターへ行けない話をしてたこと等を深刻な表情で伝えたりもする。そんな時は遊戯治療のThというよりは面接のような気持でJの気持を受けとめ、時によってアドバイスを行ったこともある。

学校では4年生になり、友人も7～8人にふえた。担任も意欲的だと評価している。

家庭では、父が日曜大工をする時などにJが助手となり、母の言葉を借りれば男の世界を築き上げているようだという。5月になり祖母から母へ「親がためた方がたまる」という理由で財布が渡された。寺独特の収支であり、母はかなりの戸惑いをみせたが、母担当者のアドバイスもあって、何とかやりくりしているようである。一時は目まぐるしく出現した家族の病気も今のところ鳴りをひそめている。ただ姉が3月頃からかくれ食いするようになり、5月頃からは自分のことを「ちゃん」づけで呼んだりして、しきりに母に甘える様子がみられる。長い間続いていたチックはなくなり、自分を率直に表現し始めたのかもしれない。しかし、姉に対しては母の対応に不十分なところがあって今後の問題となる可能性が残されている。

## 考 察

小学1年の終り頃から発症した抜毛癖を契機として開始

した治療の経過について記した。

本ケースの場合、小片（1978）が指摘するように、抜毛行動が生ずる以前に問題行動が現われており、抜毛行動はその後の一時期の葛藤状況から生じて来たものかといえよう。抜毛発症以前の問題としては、4歳から爪かみ、無気力、

集団不適応が認められる。加えて、3歳頃から起こり就学と同時に頻発した自家中毒症も精神的ストレスが誘因となって表われたと推定される。これらの症状の発症と治療後の変化を、関連すると思われる家族の病気や対応の変化と合わせて図11に示した。

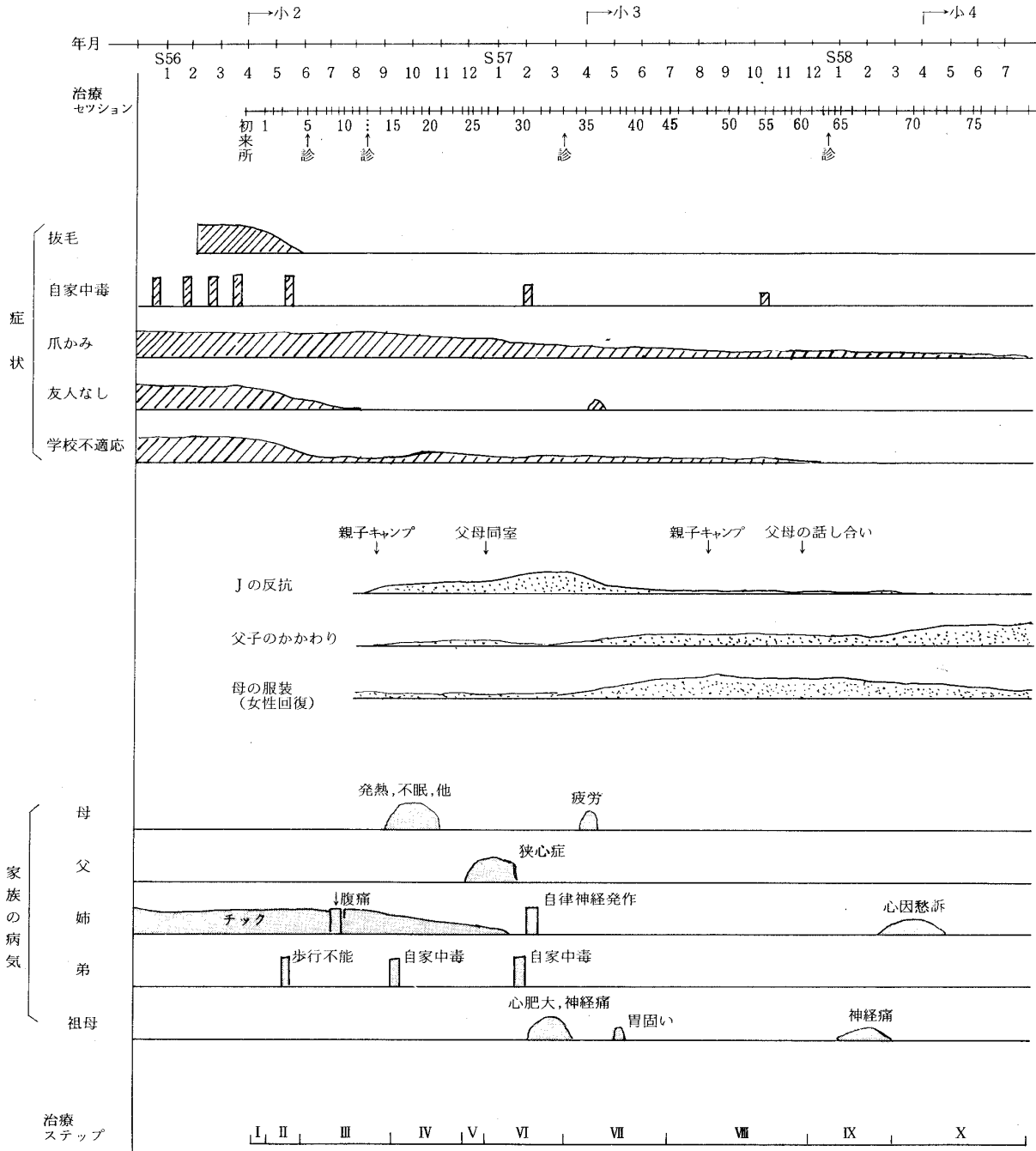


図11. Jの症状と家族状況の変化

図11に示すように、抜毛に代表される患児の諸症状は治療開始直後から減少をはじめ、3か月後には主訴である抜毛は全く消失している。この点のみをみれば、10歳以下の抜毛は治癒転機をみやすいという過去の文献(小口ら,1976;木村ら,1962)と一致する。しかし、これは本当に治療が完成したということではなく、第1回目の箱庭で示されたように、患児がThの作った「円」に守られて「工事」を始めたということであって、転移性の治癒にすぎないと解される。それを示しているのが経過中Ⅳの時期にみられた母子双方の混乱であろう。小口ら(1976)は、抜毛を呈する児童の場合養育者からの過干渉あるいは敵対的態度があり、児童の側には破壊的マゾヒズム的傾向があるとの高石らの言葉を引用している。患児の姉は極端な体罰で躰られ、かつては近所でも評判の「できた子」であったという。姉と比べてJは、いわば母の躰の失敗作であろうが、その干渉の様子はすさまじい。学校の連絡帳は母と担任の膨大な量の文字で埋められている。完全性を求め有無を言わせぬ理詰で迫る母に対して全く反抗できず、兄弟との喧嘩もできぬまま、爪が変形する程にかみ、髪を抜く状態はマゾヒズム傾向といってもよいのではなかろうか。マゾヒズムはサディスティックな傾向と表裏をなしていることは言うまでもない。Thによって自己表現を保証されたJは、その深層に貯えていた攻撃性を一挙に表出したと考えられる。

本児を含む3人の子を、母流の「よい子」に育てることでしか家族内での位置を保てなかった(後述)母にとって、盗みまがいのことをしたり、口答えや悪戯をするようになった本児の変化をすぐには受けとめることができなかつたのは当然であったと言えよう。心理的に処理しきれない量のストレスは心身症的な症状となって表われる。間もなく、母はこの危機的状況から脱し、子供達に対する過干渉でひどい仕打ちが自分の八つ当たりすぎないことや、もっと別の問題があったことに気付いていく。これが夫婦の問題であったことはⅤ期に表現されている。

母の問題がその背景としての家族から出て来るものであることは既にⅡ期において暗示されていた。Ⅲ期に行った診察で父との面接の方針が出ている。しかし、この時期、祖母、父は、「治るものなら通うのは良いが」といいつつ、一方的に母を批判するのみであったという。Ⅲ期以降2、3回父の来所をすすめたが、明確な返答がないまま母のみの来所しか得られていない。その原因として、母自身話すべきことがまだ山積していたこと、母の性格から、センタ一の係わりは人まかせにできないであろうこと、家族に来所を説得する程母自身自由になっていないことが考えられる。母が構えなく父と会話をするのは、来所から2年を経たⅨ、Ⅹ期のことである。

我々はこれを押し切って家庭訪問し、家族治療にあたることはしなかった。母の混乱が身体的レベルにまで至ったことや、Jの攻撃性が箱庭の中に何らの具体物もおけない(自分自身が入って砂を部屋中にまき散らした)程度に至ったことから、母子の成長を待つことが先決であると考えた。実際、この後に、Jは「死と再生」をテーマとするような自己表現を遊びの中で行い、母自身も1つの気づきがあって、次の時期には家族への一石が投げられる。

母が夫婦の決定的な問題に言及して間もなく、夫が狭心症の発作を起こしている。心理治療を行っていく場合、タイミングを一にして事件が起こることがままあるといわれる。父の発作はまさしくこれだといえよう。自尊心によって互いの部屋を訪れることさえ拒んでいた夫婦は、これをきっかけとして6年ぶりに同室するようになった。母の側に問題意識の芽生えがあったとはいえ、心のわだかまりが十分とけぬま、夫婦が同室したことで家族内の力動が変化することは当然考えられる。

丈夫だった祖母は息子と入れ替るように入心臓病と神経痛で病院めぐりを始めた。姉はこの頃自然にチックが消失していたが、母が叱ろうとした途端に自律神経系の反応を起こし3か所の病院をまわっている。姉のチックの消失は母子治療の副産物的なものと思われるが、しかしなお全面的に受け入れ合う関係には至っていなかったのだと思われる。

病気がいえた後、父親がぎこちないながら子供と遊ぶようになった。誰の指示にも従わぬJに「気違いだから」という理由ではあつたが、父は自分の出番を感じとつたのであろう。「雪が降るよ」との祖母の抵抗するような言葉もあつたが、この後徐々に、母、J対父といった対立的関係がなくなっていく。そして、Jの家庭での激しい反抗も急速に消えていった。

父は少しずつ父親の役割をとりはじめたものの、姑、妻との関係ではまだ逃避的であったようである。しかし昭和57年5月の夫婦の居室での一杯のコーヒー、昭和57年7月の第2回親子キャンプ、そして数回のコンサート鑑賞を機会に夫婦の溝は徐々に埋められていったようである。昭和57年10月、母は初めて父が祖母とやり合うのを見て複雑な思いをしている。

昭和57年の秋は家族にとって静かな何か月間である。母の不満が3か月に1度位Jへ向けられ、同じ周期で治療室のJも少々攻撃的となった。第2の変化のための長い準備の期間である。そして11月末、両親が相対する日がやって来る。今までの、父が子とふれ、間接的に眺める母という関係が、父対母という関係の中で率直に意見が交わされる。1年前の診察時に提案された剣道を習うかどうかについて、8ヵ月もたったこの時話がされている。父と身構えず話を

している自分を、再発見したように母は語っている。

昭和58年の冬は祖母が神経痛になっただけですぎている。

現在Jは成績こそかばしくないが、積極性が増し、友人関係もほぼ良好である。抜毛は一切なく時折口ごもった話し方をしたり、執拗に爪を切る以外は問題はないように思う。父との関係もよく、寺の跡とりとしての意識が強い。この家族の中で問題が残るのは姉であるが、大人びてこまちゃくれ、憎らしいと母から評されていた彼女は、頭痛、腹痛、不眠などの心因愁訴を訴え母と同室でねたり、病院通いをした後、退行的になって来ている。必要以上に背伸びをしていた彼女が今後どのように変化するのが気になる場所である。母J共に、依然として通所を希望しているのもこの辺の問題に関連するのかもしれない。

以上、治療経過に従って家族全体が変化していく様子をとり上げた。では、患児の発症は家族の問題とどのように結びついて生起して来たのであろうか。

問題は母がこの家に嫁して来た時に始まったと思われる。母は、甘えん坊の反面、土蔵に入れられても歌をうたっているような勝気な面をもっていったという。母の父は不在勝ちの人で、子供を近づけない雰囲気の人だったと言うが、母は小学校高学年頃にはニュースを話題にしたりしてこの父に近づこうとしたということである。希望していた声学への進路はこの父の反対もあって挫折している。他方、本児の父も又不本意な進路へとすすんでいた。父母が知り合った合唱団は、母にとっては果し得なかった夢とつながるものであろうし、父にとっても自分が今生きている寺という世界とは異なる世界へとつながるものだったのではなかろうか。2人の結婚は自分が生きれなかった部分を補おうとするものだったと解される。しかし、2人の夢と寺という世界のギャップは大きかったのであろう。破綻は結婚早々にやって来る。1人の女性として迎えられた筈の嫁家で母は自分の存在できる位置を探し出すことはできなかったようである。流産を機に、なじるだけの父の態度に、母はもう婚家へは戻れないのではないかと不安を抱え始める。母は3か月で経を修得し、本山で資格を得、1人の女性としてではなく寺の嫁として、分身である子供を立派に育てることでしか自分の場を作ることはできないと思いつめる。流産で分身を失った母は、同時に自分の同化すべき女性性をも失ったのではなかろうか。

寺の嫁として生きようとした母は、3人の子をもうけた後もその位置をみつけれないままであったのだらう。末子誕生の一年後、夫婦は寝室を別にする。自分自身も寺との同化が十分にできずにいた父は趣味に没頭し、母の女性性を生かしたまま、共に寺で生きれるようにカバーすることはできなかったのであろう。ここに及んで母の女性性の

喪失は完全なものになったと言える。

母は「女」であって初めて「母」であり得る。女性性を捨て、がむしゃらに寺の中で生きる完全主義的な母の生き方は、子供達にとって母を喪失することと同義であったであろう。「女」を捨てることで寺の一員であろうとした母は厳格に子供達を育て上げ、同時に許容し包み込むことのない、子供達にとってよりどころのない母子関係をも形成していったのであろう。

寺への同化を求める母は、学生時代、漠然とながらキリスト教会へ足を運んだこともあり、寺を拒否する母でもあったであろう。そんな中で、子供を寺の子として一人前にすることは、壇家や「寺」そのものである姑を見返すことである反面、寺に十分帰依できない自分を罰することでもあったのかもしれない。母にとって、長男である患児の存在は大きく、この子が立派に育つことで初めてこの寺に残り得るのであり、失敗は許されなかった。

3人の子供達は極端に礼儀正しい子供に育ち、一方でチックや頻繁な自家中毒、突発的な歩行不能を持病とする子供達でもあった。それぞれに助けを求めつつ奇妙にバランスを保った家族像であったと思われる。

以上のことから母子が変化した治療の根幹に、母が捨てるを得なかった女性性の回復を確認する必要性があると考えられる。そのバロメーターの1つとして母の服装の変化をみることができる。図11に示したように、担当者は来所後4か月で母の服装の変化に気付いている。これに対して父からの評価はきいていないが、Jは「きれいだね」と言ってくれると聞いた。そして、家族全員が病気に罹患した後、この傾向は一段と明確になっている。この時期こそ、父が子供達との接触を始めた時期でもあるのである。

抜毛という問題を契機に母子併行面接をすすめて来たのであるが、実際には母子を窓口として家族の動きをみつめて来たといってもよい。母子共に変化が認められるが、これは家族の変化なしには確立されなかったものであろう。この家族とのかかわりの中で、もう一方の核ともいえる父親と接触できずに来たこと、又もう1人の患児ともいえる姉に対して極めて間接的なケアしかできないことが、Thらの反省点であり今後の課題でもある。いずれにしろ、母子2人との接触だけしか行えなかったのに、2年間の通所に耐え、前記のような家族全体の抱える困難を克服しながら進み得たのは、母やJに内在した洞察力や治癒力によるころが大きかったと考える。

最近、Jは来所日を忘れて、他の行事との都合で来所を迷うこともでて来たようである。その意味ではJの巣立ちの日は遠くない。又、父と祖母が仕事のことでも対立したり、祖母から母へ財布の一部が渡されたりして世代交代が

行われつつある。父は住職としての仕事にも意欲を見せはじめているという。この夫婦が心理的に「寺」をひきうけされた時に真の意味で治療が完成するのではなかろうか。

最後に、本事例は、昭和57年5月に京都大学の河合準雄教授の臨席を得て行われた金沢箱庭療法研究会に事例提供し、貴重なコメントをいただいている。通所継続について是非を問われていた時期に、Jをこの家族のパイロットとして治療を継続しなさいと言われたことや、家族の中にひそむ問題性について示唆されたことが、その後の治療継続に大きな支えとなったことをここで表明し、感謝したい。

#### 引用文献

池淵恵美, 齊藤治, 増井寛治, 亀山知道, 安西信雄, 丹羽真一 1982 脳波異常をもつ trichotillomania の 2 症例

精神医学, 24, 768-771.

小口徹, 佐藤喜一郎, 齊藤隆三 1976 Trichotillomania の精神医学的考察—自験例7例を中心に— 精神医学, 18, 43-50.

木村定, 篠原大典, 国吉政一, 川端つね, 三好暁光 1962 抜毛癖に関する考察—その発達史的・力動的機制について— 精神医学, 4, 239-242.

黒田弘彦 1975 母親との関係で興味ある経過をたどった Trichotillomania の一例 精神身体医学, 15, 418-419.

小片富美子, 渡辺庸子 1978 抜毛癖を主症状とした神経症の1例 臨床精神医学, 7, 229-233.